

# 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成26年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラム	申請大学名	名古屋大学
申請大学長名	濱口 道成		
プログラム責任者	高橋 雅英		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本プログラムは着実に実施され、6つのワーキンググループ(WG)の活動も本格化し、執行委員会を中心に各WG間の連携体制も整っている。本年6月には選抜が行われ、本プログラムへの参加学生も確定し、本年10月からの本格的なプログラム稼働に向けた準備態勢が整ってきていることが確認できた。</li> <li>4研究科5部局の教員・職員が全学的な体制で臨んでおり、本プログラムに向けての熱意が伝わった。</li> <li>昨年の12月から本年9月までの予定で研究アシスタントによる試行プログラムが実行されているが、特別講演、Cross-cultural Talk、海外実地研修、英語コミュニケーション能力の強化プログラムなどの試行がなされ、参加者からのフィードバックに基づき、さらなる充実が目指されている。</li> </ul> <p>○ 応募状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平成26年度入学の学生選抜においては、多少の偏りは見られたものの、各研究科に跨がって総勢29名の応募があった。また、女子学生を主体としつつも男女共同参画に理解を持つ男子学生の参加を積極的に奨励するという方針どおり、男子学生の応募・採用があったことも確認できた。(合格者補欠を含め24名。内7名が男子学生)</li> </ul> <p>○ キャリアパスの開拓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>採択にあたって不安が残ると指摘されたキャリアパスの開拓について、ASEAN、JICAなどの国際機関との連携の強化やグローバル企業への広報など、改善の試みが見られた。しかし、キャリアパスが文系の国際協力機関に偏っている印象がある。</li> </ul> <p>○ 学生の負担</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>プログラム実施キャンパスと、学生の所属先キャンパスが異なる場合、キャンパス間の移動が学生の負担になっているように見受けられた。</li> </ul> <p>2. 意見(改善を要する点、実施した助言等)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>4つの研究科に応募者があったが、国際開発研究科への応募者数が抜きんでている。他の研究科、特に理系学生への働きかけが重要である。</li> <li>各学生の主たる専攻にプラスしてのプログラムであるため、相当の負担になる。主専攻の内容(文系、理系など)によって負担の度合が異なる点を考慮した柔軟な運営が必要である。</li> <li>将来のキャリアパスについて、国際開発研究科以外の学生に対するキャリアパスの構築が引き続き今後の重要課題となっている。また、とりわけ文系については、研究者以外のルート開拓を行い、博士課程に進学しようとする学生の不安を取り除く必要がある。</li> <li>英語強化プログラムについては、入学する学生の能力に、年度ごと、専攻ごとに違いがあるので、この点に対応できる柔軟性、適切なプログラムを統括する専門部署の設置、こうした問題に精通する専門スタッフの強化、などが必要である。</li> <li>アジア地域に根を下ろすため、また、貧困、医療、食などにおける現場コミュニケーションが必要となるため、共通語は英語のみでは不十分である。現地語の習得についても一定の試みがなされていることは評価できるが、これをさらに強化するプログラムを用意する必要がある。</li> </ul>			